



にじむ親心 お便りに感謝

読者の皆さん

大学取材班

日ごろから「拝啓」のコーナーにご意見をいただき、ありがとうございます。毎週、大学に関するさまざまなメッセージを載せておりますが、今回は皆さんから寄せられた声の一部をご紹介します。

しばらく前になりますが、3月10日掲載の「『援助は大学まで』親子で約束を」という記事には、多くの反響をいただきました。

女子栄養大学常任理事の染谷忠彦さんが保護者の方々に向けて「大学入学前のお子さん(卒業後は経済的援助を受けない)誓約書を書かせましょう」「学費の半分とか3分の1を自分で負担する」という約束も盛り込めれば……」などと呼びかけた文章です。集団就職して女手ひとつで

2人のお子さんを育てたという兵庫県の女性からは「『若いときの苦労は買ってでもせよ』の箴言を思い出します」とメールをいただきました。ご長女は公務員をしながら大学の夜間学部を卒業し、奨学金も完済したそうです。

4人の娘さんを育てた島根県の女性からは、最近では社会に出た子どもをさらに援助し続ける親が多く、「むしろそうしない(自分のような)親が変な親なのです」との意見をいただきました。「障害を親がすべて取り除くのではなく、どうしたら乗

親にこんな気兼ねをする学生も多かったことでしょう。

大卒の息子さんに「3年間は、月々7万円の仕送りをしました」との投書もいただきました。就職難でパート店員になったものの、手取り10万円に満たなかった



そうです。親は大学で終わり」のつもりでも、手をさしのべざるを得ない時があります。

福島の女性からは「大学に入って教科書となる本(の代金)さえも遠慮して言えなかったことも覚えていま」と、学生時代を振り返るお便りをいただきました。暮らしが今よりも質素だった時代には、学費を出してくれる